

川筋^{かたぎ}氣質の男 中村哲

大平 忠

川筋氣質とは、福岡・筑豊の炭鉱地区から遠賀川周辺、さらに洞海湾を経て若松に至る地区の、石炭の採掘・運搬・荷役に関わった人々の氣質と言われている。この言葉を知ったのは昭和37年三菱化成に入社し、北九州・黒崎工場で三交替の現場実習の時だった。夜勤明けに現場の職長に酒屋へ連れて行かれ、「筋を通す」「喧嘩っ早い」「弱きを助け強きを挫く」川筋氣質のことを教えて貰った。

ちょうどその頃、石原裕次郎主演の『花と龍』の映画が封切られた。若松港石炭荷役の沖仲仕の頭だった玉井金五郎がモデルとされ、原作は息子の火野葦平だった。映画館は満員で、「裕ちゃん、日本一！」と、威勢のいい掛け声も飛んだ。

2019年、アフガニスタンで銃撃を受け73才で亡くなった中村哲医師は、玉井金五郎の孫だった。火野葦平は伯父に当たる。中村は、若松で育ち古賀で学生時代を過ごした。幼少期に一緒に暮らした祖父玉井金五郎と祖母マンから大きな影響を受けた。「弱きを助ける」精神はこの時植え付けられたという。学生時代にはバプテスト教会に通いクリスチャンになった。

中村は、1984年37才の時パキスタンに医師として派遣され、やがて拠点をアフガニスタンへ移す。病人と接しているうちに水が無いための病気の多発に気づき1600の井戸を掘る。しかし、天候異変の大渇水のため農地が砂漠化し400万人の人々が飢餓に陥った。そして「100の診療所よりも一つの用水路が必要である」と、独学で土木を学び、地域の人々と一緒に殆ど人力で25キロに渡る用水路を7年かけて2010年に完成させた。砂漠だった土地は農地となり、今や65万人の人々が暮らしているという。この後中村は9つの用水路を作った。

「弱きを助ける」川筋氣質とクリスチャンの心が、数多くの人々の命と生活を救った。「カカ ムラド（村のおじさん）」と呼ばれて親しまれた中村哲の名は、アフガニスタンの歴史に長く残ることであろう。

(令和4年1月7日)